

【連載特集】筆の里工房周辺の整備事業  
～つながる つなげる～ (その2)

わずか76年後には、日本の人口が今の半数に減少すると見込まれるなか、“ふるさと熊野”を子や孫に残すために、私たちには今できることがあります。個性豊かな文化を活かした魅力的なまちづくりも、移住する場所、住み続ける場所として人々をまちに惹き付ける大切な取り組みの一つのほうです。熊野町は筆産業とそれにより培われた文化芸術が息づくまちです。このソフトパワーを活かし、この地に住む人々がつながり、まちと文化を未来につなげるため、都市公園と観光交流拠点施設の建設を進めています。今月号では、平成の時代の初め頃の官民それぞれによる観光開発や自然公園構想の議論や経緯、成果などを紹介します。

☎〔公園について〕都市整備課 ☎820-5608  
☎〔施設について〕産業観光課 ☎820-5602



◀前回の記事はこちらからご覧ください

【「筆の里くまの会議」の結成と活動】

町の資源を活かして「いい町つくろう」を合言葉に、町商工会青年部のメンバーのほか、町職員や一般の若者も加わり「筆の里くまの会議」が立ち上がりました。今から35年前、平成元年のことです。定例会の会議のほか、4つの部会活動では昼夜を問わず活発な議論が交わされ、まちの自然、歴史、文化財といった身近な地域資源を活かした自然公園の整備、市街地への特徴的な街灯や町の玄関口へのモニュメントの設置などさまざまなアイデアが発案されました。

2年間にわたる検討の成果は、『筆の里くまの観光基本構想報告書』としてまとめられました。報告書には、町の観光のシンボルゾーンとなる公園の中に書道美術館や工芸伝承館などを整備するという精力的な提案が打ち出されています。こうした活動による気運の高まりは、やがて筆の里工房の設置へと結実し、今につながっています。



当時の会員からのメッセージ  
- 梶山孝之さん -



地域経済の不安定化や町の活力低下への商工会青年部の危機意識が会議発足の契機でした。20代後半から30代後半が中心の若い集団で、時には50人近くが集まり、熱い議論が深夜に及ぶこともあり。1年目は町の資源を整理し、2年目はまちづくりに対する会議としての意思を示しました。ふり返ると当時は全国的に地方創生のブームにわき、会員たちには、その波に乗ろうとする気運や熱気がありました。

真の観光は“もてなしの心”が大切です。これからつくる施設は、例えば訪問客の応接に町民が気軽に使えることができるような、自由で身近なもてなしの場であつたらいいですね。創作体験などのサービスではものづくりの原点である創作者の主体性への配慮、施設管理面では制約を極力設けず、利用者の自己責任を促していくといった姿勢がほしいものです。

新たな施設の良さが口コミで広がるよう、試行錯誤を楽しみながら、魅力的な施設づくりをしてください。期待しています。

【「自然公園計画」から「筆の里工房」整備へ】

平成元年度以降、町では町民へのアイデア募集や庁内での政策研究を進め、面積規模が4ヘクタールの「筆の里自然公園計画」を立案しました。

平成3年には各種団体や学識経験者による「熊野町まちづくり委員会」が編成され、計画の具体化を図る体制が整えられました。

そうしたなか、用地交渉において一部の土地の確保が見通せなくなったことから、平成4年に入り、面積規模を1ヘクタールに縮小した「筆の里工房建設事業」へと計画変更し、現在の「筆の里工房」の設置に至っています。

これから整備する公園は、構想初期に立案された「筆の里自然公園計画」に匹敵する4.3ヘクタールの用地をすでに確保しています。



【引き継がれてきた町の計画】

町は法令などに基づいて策定した各種行政計画に沿って行政運営をしています。その最上位に位置し、おおむね10年周期で改訂する「総合計画」には、平成13年以降一貫して筆の里工房周辺の拡充整備を掲げ、取り組みを段階的に進めてきました。

平成29年には「熊野町観光交流拠点整備構想」をとりまとめ、観光戦略やその拠点施設整備の方向性を整理しています。

町の都市的将来像や実現方針などを示す「熊野町都市計画マスタープラン」においても、筆の里工房およびその周辺地区において、人・文化・縁がふれあう個性的で魅力のある交流・観光拠点づくりを推進すると明示しています。

これら各種計画は、町議会の議決や事業説明を経て策定や改訂が行われるもので、今後も議会と適切に連携するとともに、町民のみなさんにも町広報や町ホームページなどを通じて積極的に情報をお伝えしながら事業を推進してまいります。



8月号では、令和4年度に行った設計者選定の概要を中心にお届けします。

◀この記事の詳細はこちらをご覧ください

広報担当者がみてきて感じて  
new 熊野

☎政策企画課 ☎820-5634

「人があつまり、クリエイティブがうまれる」まちを目指して

6月12日(水)、筆の里工房で「Kumano Creative Palette」が開催されました。

「Kumano Creative Palette」ってなあに？



現在、筆の里工房北側に、新たな観光交流施設の整備を進めています。この施設を町民が活躍できる拠点とするため、分野・年齢を問わず、さまざまな「創作活動」や「モノづくり」に興味がある人が集まり、新しい施設で「したいこと」や文化芸術のまちづくりについて語り合う場として立ち上げられました。

クリエイティブなまちづくりを語り合う



ゲストスピーカー  
吉田幸弘さん  
(広島市立大学教授)

第1回となる今回は、吉田教授と石井理事長による観光交流施設の印象や施設内での創作活動について対談が行われ、町内外から45人の参加がありました。

意見交換では、参加者から「誰でもワークショップを開催できるのか」や「町民ギャラリーの計画について」などのさまざまな質問や意見が飛び交い、有意義な交流の場となりました。



ナビゲーター  
石井節夫さん  
(筆の里振興事業団理事長)

次回の開催

第2回のゲストは、安田女子大学教授・谷口邦彦さんです。みなさんぜひご参加ください。

☎9月25日(水) 18:00~19:00 所筆の里工房・交流ラウンジ 無料

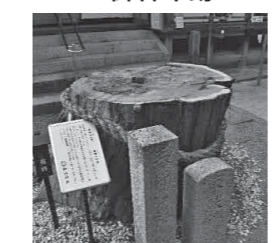
☎申問筆の里工房 ☎855-3010

神山神社の御神木を伐採～今まで町を見守ってくれてありがとう～

5月29日(水)・30日(木)、神山神社の御神木が伐採されました。



▼御神木跡



なぜ伐採されなければならなかったのか

地震や大雨、あらゆる災害に負けず、我らが熊野町を見守り続けてきた樹齢800年の大杉。

昭和30年頃には「落雷から神様と神社を守った」と言われています。その際、木の上部は焼失し、鳥居に覆いかぶさるように傾いた大杉は、数十年もの間、ワイヤーで固定され続け、幹の部分は衰えが進行している状態でした。

これ以上、ワイヤーに頼るのは限界であり、倒木の恐れもあったため、伐採されました。

伐採された木はどうなるの？

伐採された幹や枝は小さく刻まれ、お守りの中に入れる「内符」として活用されるそうです。

切り株部分は「御神木跡」として、当面、境内に残されます。伐採されてもお感じる御神木の“氣”を感じてみてはいかがでしょうか。



▲伐採の様子

